
初めての小説1

M.cor

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初めての小説1

【Nコード】

N8057Z

【作者名】

M・c o r

【あらすじ】

引きこもりの神崎翔
彼が学校に行かない理由は
担任が嫌いだから
久々に参加した宿泊学習で
翔にまさかの出来事が襲い掛かる！！
始めて投稿しますが
優しい目でみて下さいwww

初めての小説

「はあ、はあ、」

僕は息を荒くしながら遙か先に行く友達を見ていた

「こ…こんなにキツイなんて…母さんめ

騙したな……………」

僕の名前は神崎翔かんざきしょう

学校には滅多に行かない、言うなれば引きこもりだ

僕が学校に行かなくなった理由は、

イジメだとか、勉強について行けないとか

成績が悪いからとか、

そんな理由ではない。

友達だっているし、通信学校で

今の勉強も理解で来ている、

成績だって悪くない…………どちらかと言うと平均だ。

じゃあなぜ行かないのか……

完結に言うと、担任が気に食わない

担任の名前は新島ハジメ

名前がハジメのくせに、時間がたっても授業が

始まらない。

教えてくれる勉強なんて説明が下手過ぎて

クラスのほぼ全員が「何を言ってるか分からない」

と言う顔をしている

まあ、そんな話はどうでもいい、前の話に戻ろう

僕は今山道を歩いている

学校行事の宿泊学習なのだ

引きこもりの僕がこの行事に参加した理由は

わかる人はわかるのでは無いだろうか

そう、僕の担任の先生が腹痛でこの行事に

参加していないのだ。

「今日新島いなくて良かったな!!」

僕と一緒に遅く歩いていた

山野勇気が話しかけてくる

こいつは、学校に行っていない僕に

プリントや学校であつた出来事を教えてくれる

でも、たまに何の用も無く遊びに来るから

何かめんどくさい

「ああ、そうだな」

面倒なので軽く受け流す

「おいおい、今面倒くさいとか思ってるだろ!!」

.....人の心を読むな.....

「うん、思ってる」

「.....ちょ...それは無いだろ.....」

あまりにもシヨックだったらしく口が回っていない

やっぱり面倒くさいので、さっさと歩く

.....

「ああ、もう、嘘だから、な?落ち込むなって」

勇気の顔に笑顔が戻る

「だよな!俺らの友情は不滅だよな!!」

...やっぱりほっとけばよかった

あ…やべ…

言い忘れてたがこの勇氣と言う男

むっチャ泣き虫なのである

「あー、何でも無い、道戻れば何とかなるだろ
ほら、行くぞ」

「あ…うん」

よかった、急過ぎて状況が読み込めてない様だ

ええつと、ここを戻って、ここにデツカい木が…

あった、んでここを右に曲がって進めば

元来た道に………出ない

「なあ、ここも違うんじゃないか？翔」

「どうやらその様だな……なあ勇氣、どうする？」

あえてシンプルで難しい質問を試してみる

「さっき来た吊り橋のどこまでもどって

今、結構暑いしじめってるから

少しくらい足跡が残ってるはずだから

それたどってある程度まで戻ればいいんでね？」

………

むっちゃ真面目な答えが帰って来た。

「そうだな、そうしてみるか

まあ、無理だろうけど」

そしてチャレンジ

20分後

目の前は川

奥には…炊飯処

うん、着いた

「おーい、神崎、山野、遅いぞー」

遠くで女子が叫ぶ

「相変わらずうつせえよな智子は」

「い…いや…これには訳があああああ」
僕は何も聞いてない
何も見てない
何も知らない

智子の恐怖

しばらくして、僕は今テントを建てている

カン　カン　カン　カン

「ああ、指いってえ、しかもじめってるから足場わりいし……」

などとブツブツ独り言を言いながら

一人寂しくテントを建てている

「なーに独りごといってんですかー！」

こんな時ほどファイトっすよ、翔さん！……！」

こいつは、橋本明日香（女子）

背は小さくてすばしっこい

この班の和ませ役なのだが、

なぜか同い年なのに

僕を翔さんと言ってたっている

しかも敬語で……

しかも皆に……

「ほれほれ明日香、あんたの大好きな翔くんはテント張ってんだから、あんたは料理手伝いな」

「ん？智子さん、今何か変な事言いませんでしたか何かこう……つかかかる様なかんじの言葉が……」

大好きな翔くんが、と言うところが

引っかかっているのだろう

「ん？いゝや、なんにもお」

お玉をクルクル回しながら

ニコニコして炊飯処にもどって行く

「ちよつと待つてくださいよー……」

その後をすごい勢いで明日香が追いかけて行く

……… 疲れる …… ひどく疲れる

それなのに勇氣は………

「おっほお!!」

んまそく、食べちゃお」

智子の目を盗んでつまみ食いをしている

「智子さん

ご飯炊けましたって……… あれ?

ここにあつた兎リンゴ一つたりなく無いですか?」

「ん? そういや一個足りないな……… ん?」

シャク シャク シャク

「なんの音ですかね………

あー……… 勇氣さん?!?!」

やーい、見つかつてやんの

「んぐ?! やつべ?!?!」

急いで逃げるがもう遅い、

先回りしていた智子に捕まった様だ

「よくも食いやがったなあああああ

大変だったんだぞこらあああああ

ベキイイイイ

勇氣空を飛ぶ P a r t 2

それはさておき、あんな事やってる内に

テントが出来た

いまの現状をわざと聞いていてみる

「んー? 勇氣どうしたの?」

何があつたのかももちろん知ってるが

いたずら半分で聞いてみた

「しょーー

たすけてくれえよお」

勇氣が泣き目になりながら走ってくる

スッ 横にかわして

ガッ はい、足掛け

ズベエエエエエエエエエエエ

はい、顔面こすり

「ふごあああつつ」

……翔くん……ひどいよ……ね」

やべ、気絶しちまいやがった

「ちよつと来てもらおうか？」

ゆーきくん？」

気絶しているのも関係なしに

首元をつかんで引きずって行く

智子……お前って一体……

智子の恐怖（後書き）

さ、

智子に捕まってしまった勇氣くん
彼の運命やいかに

明日香のカレー

「はい、翔さん、大盛りですー!」

明日香がよそつてくれたのが……

何これ……皿の上なのに……

火の上じゃ無いのに……沸騰してる?

「どうぞー遠慮しないで食べて下さいー!」

いや、どうぞって言われても……

どうやって食えってんだ

「ふー、やっと反省したみたいだぜ」

「ん? ああ、智子か」

そう言えばさつき勇気を引きずって行っただけ

「ほら、はやく謝りな」

そう言っただけから引張って来たのが

……え……だれ?

もはや誰かの面影も無い

目元も腫れて、鼻にはティッシュ……

んん?????

もしかして、勇気なのか

「なあ、智子……そいつって、勇気だよな?」

恐る恐る聞いてみる

「んあ? ああ、そうだよ

ちよつと殴り過ぎたかな」

……ええ、そりゃあねえだろ

「うつ、痛え……ひでえよ智子」

だよなあ、そう思うよなあ

「あつ!ー! 飯が出来てる!ー! いったただっきまーす!ー!」

「「あつ!ー! 馬鹿、勇気」」

「なあ、翔は食うよなあ？」

わざとらしく智子が微笑む…怖えよお

「も…もちろんさ、く…食うに決まってるだろ」

自分でも思いもしなかった言葉が出てきた

しかし言ってしまったのだから取り返しが付かない

ガツ　ガツ　ガツ　ガツ

とにかく口に放り込む

ここで吐いたら勇気と同じ末路になってしまう

「ぐ…うま…うまい…くっ…かはっ…

うん、うま…かはっ…くえっ…うんうまい…」

ポンッと肩を叩いた智子、そして小さい声で

「よく…よく耐えた…」

と…智子が泣き目になってる

「うちもさ、明日香が料理下手なの知ってたんだ」

え…じゃあなんで作らせたんだ……………

明日香のカレー（後書き）

ありえないカレーを食べた

翔くんと勇気くん

これから彼らは

どうなってしまうのか

それは

次回のお楽しみwww

山中遭遇

さて、

飯もすませた

トイレも行った

これでこれからのハイキングは問題ない…

と、言いたいところだが、

大丈夫じゃ無い奴が約1名…

「ううう、まだぎぼぢわるい…」

さっきのカレーがまだきいてるようだ…

「ほーら、はやく行くぞー」

そんな勇気の事はほっというて

さっさと行く智子と明日香、

相変わらずひでえ奴だな、

「おら、勇気いくぞー」

とにかく早く行かなければまたはぐれる

「わがっただがらゆらざないでええええ」

「ぬおっ?!、吐くなら言えこの馬鹿」

ベシツツツツ

しまった、思いつきり後頭部を殴ってしまった。

ああ、じれったい

とにかく揺り起こして急がねば…

「おい、勇気早く起き……………」

「「きやああああああああああああああああ」

声にならない叫びとはこの事だろうか…

あれは智子?それに明日香?

何で叫んでんだ?おふざけ?

それにしては、度が過ぎるとゆうか……

「……ん……今の声誰？」

おお、勇気が起きた

「いや、それが、智子と明日香みたいなんだ」

「え？あの智子が叫んだの？まさかそんな事…」

ダダダダダダダダダダダ

先に行っていた明日香が血相をかかえて走って来た

「はあ…はあ…はあ…し…翔…さん

はやく…早く来て下さい！！」

息を切らしながらただ事では無い様な不陰気だ。

「ど…どうした？何かあったのか？」

取り合えず今の現状を詳しく聞いた。

明日香の言う事だと

先に行つたはいいが、地図のとうり進んでも

目印がなかなか見つからず

引き返そうとしたら

何者かにいきなり襲われかけたのだと言う

「まじか？それやばくね？」

急いで行くぞ勇気」

「おう！任せろ」

「明日香、案内しろ！！」

「はいっ！！！！」

とにかく急がなければ、智子に何かが起きている

急げ…急げ…急げ…

「ここの先ですー！！」

明日香が指をさすのは………？

「お…おい、明日香？これ…何？」

「え？何って………？！ひっっ！！」

明日香の顔が引きつった。

それもそうだろう、

太い木の棒をもってしゃがみこんでいる智子がいる
棒には血がついている

その数m先には倒れた人がいる…

きつと、もう死んでいるだろう、

「おい…智子？　　一体何があつたんだ？」

とにかく何があつたのが聞きたい…

すると、智子は死体を指差し震えた声でこう言った

「こいつ……人間じゃ無い」

あの智子が、さっきまで笑っていた智子が

力ずよい智子は、もう、そこにはいなかった

ただ何かに怯える、まるで小さな少女の様に……

山中遭遇（後書き）

いきなり現れた謎の人間
こいつは一体何者なのか
次回に続く

翔の戦い？

とにかく僕は、怯えて震える智子をなだめ
その倒れた死体に歩み寄る

酷いぞまだ

顔面は砕かれ、顎がどこにあつたのかが解らない
目は両方とも別々の方向に向いている
これ以上は見えていられない
だけど、もしかしたらと思ひ
脈を見してみる

トクッ

?!?!?!?!?!?!?!?

僕はあまりの驚きに後ろに飛び退いた

何だ今のは、死んでいても可笑しく無いのに
なんで脈が動いているんだ？

とにかくわけが解らない

そう思い、智子の元へ行こうとした……

次の瞬間

ガシツ

足を掴まれた

「うわっっ？！？！」

そのまま僕は地面に倒れこむ

ウ
ウ
ッ
ッ

ウ
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア

さつきまで倒れていたのに……
死にかけていたのに

歩いている

動いている

「おい！！翔！！！！ボーツとすんな！！！」

勇気が言い終わるのと同時に

あの太い木の棒を持つて

智子が見つ込んで来る

「うああああああああああ！！！！！！！」

力一杯木の棒を振り下ろす

ゴツ…………グシャツツツツ

頭が吹き飛ぶ

返り血が智子の顔を紅に染めていく

「あ……ありがとう……助かった」

そうお礼を言くと、智子の手を引いて

勇気たちの元へ戻る

明日香は勇気にしがみつき泣いている

勇気はその明日香をしつかり抱きしめている

はたから見れば、兄妹のような物だ

「皆無事だな？よし、取り合えず

キャンプ場まで一旦戻ろう」

急な事で皆がパニックになっている

しかし、何故こんな事が起きたのか

疑問点は3つ

1つ なぜいきなり襲って来たのか

2つ どうしてハイキングコースに居たのか

そして3つ目は、どうしてあの状況で生きていたか

この3つが疑問だ。

いきなり襲って来たと、明日香は言っていた。
なぜ？なんのために？

それに、このハイキングコースは
先生達が危険は無いからはじめ調べていて
今回は貸し切りで誰もいないはずなのだ。

……そして、1番の疑問……

どうして、顎が碎かれ、

目も正常に見えていない人間が
いきなり襲って来たのかだ。

人間は、自然死以外の死に方
つまり、他殺や溺死などでは、

よく、目が別々の方向を向いている事がある
あの碎け方ならば、

一瞬で即死になっても可笑しくは無い

僕はキャンプ場に向かいながら
ずっとその事だけを考えていた
ゲームや映画でよくある事……

とも考えられるが、あれはウィルスによる物で
感染していくのだ、しかし第一に

僕らも、キャンプ場にいた、別の班の友達も
誰もそんな事にはなっていなかった。

しかし、僕らはまだ

これから起きる、最低最悪の悪夢があるとは
誰もきずいてはいなかっただろう……

翔の戦い？（後書き）

しんでいたはずなのにいきっていた
こいつはなんなのか

次回を

お楽しみにw w w w w

5 v s 2

ザクッ…ザクッ…

湿っている山路を、

皆がいるキャンプ場に向かって歩く

まさかあんな事に

なるなんて……

「なあ、翔……」

「なんだ？」

気の重そうな感じで、会話が弾まない

「さつき智子が殺したやつ……」

あいつ、6組の貴之じゃないか？」

6組の貴之……学校でいろいろ面倒を起こしている

……言うならば問題児だ

「ふざけてんのか？ 勇気……」

あんな事があつた後だから

皆ピリピリしてるのだ

「貴之な訳ないだろ、何であいつが

智子や明日香を襲うんだ？」

あまりそう言う様な……

誰かを疑う事なんてしたくない

……カッン……

……何かが足に当たった……これは……鉄パイプ？

「護身用に持ったとか……」

僕は鉄パイプを片手に握りしめ先頭を歩く

しばらく歩いて、キャンプ場が見えて来た

「おい、そろそろつくぞ」

キャンプ場の方では、明るい灯りがついている

……………ん？

でも、あれは明る過ぎないか？

「俺ちよつと行つてくる！！！」

勇氣が一目散に走って行く

「僕らも行こう」

智子と明日香に声をかけ

駆け足でキャンプ場へ向かう

キャンプ場についた……………

「なんだ…これ」

僕らは絶句した

あたり一面が 血と火の海だ

「あ………… ああああああ！！！」

勇氣が叫ぶ

火の中で何人かの人影が確認できる

「ちよつと行つてくる」

鉄パイプをしっかりと握りしめ影に向かって行く

「誰かいるのか？」

恐る恐る聞いてみるが、応答は無い

ため息をついて気を抜いた瞬間

キアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！

「うおお！！！！！！！！！！」

火の中から燃え盛る人間が飛び出して来た

しかも…1…2…3…4…5…
え？多くね？

「おら！翔！！ボーツとすんな！！！！」

智子が木の棒を持って応戦して来た

「馬鹿野郎！！！！危ねえから引ッ込んでろ！！！！」
「断る！！」

……即答かよ

「んじゃあ、足ひっぱんなよ！！」

「お前もな！！！！」

……また即答

「うおらああああああああ！！！！！！！！！！」

ベキイイイイ

「まず一匹目え」

シャアアア！！

「うわっ！！」

「ボーツとすんなっつったのはお前だろうが！！」

グシャツツツツ

「よっしゃあ、どんどん行くぞオラアア！！！！」

何でだろうか、こんな状況なのに

無茶苦茶楽しい

「オラオラオラオラオラオラアアア！！！！！！」

ベキッ！！グシャ！！ガスツツ！！

………

「ふう、何とかなっ たな」

全身返り血まみれの僕を見て
明日香が泣き出す

「ほらほら、泣くんじゃ無いよ、明日香」

「ヒック…グスッ…どもござあああん………！」
んなおおげさな

とにかく朝まで安全を確保しよう

僕らは、テントを移動して

そこで夜を過ごす事にした。

5 v s 2 (後書き)

夜をテントで過ごす事にした

翔くん達

しかしこの選択が皆を危険に晒してしまう

次回に続くw w w w w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8057z/>

初めての小説1

2011年12月26日22時56分発行